

「日本」と「太陽」は 関係が深い

ブリタニカで「日章旗」を調べると日本の国旗である日の丸の旗は嘉永6(1853)年の M. ペリー来航後、対外関係のうえから国旗の制定が不可避となり、薩摩藩主島津斉彬の考案に基づいて日の丸が採用された、と出ている。

明治3(1870)年1月明治新政府は郵船及商船規則(太政官布告57号)で商船の掲げるべき国旗として、さらに明治3年10月の太政官布告651号では軍艦用の国旗として日章旗の規格などについて定めた。

しかし、これは日章旗を国旗と定める明文の法規定を伴ったものではなく、既成事実としてその後も使用されてきたものであった。

そのため1999年8月に「国旗・国歌法」を制定し、正式に日章旗を国旗と規定した。

日本は「太陽の恵み」を農耕に生かして来た民族です。

日本人の総氏神、天皇家の、つまり、皇室の祖先である天照大神(あまてらすおおみかみ)も太陽神です。

神話の時代から続く日本の歴史、昔の人はうまい事を考えたものです。

聖徳太子は隋の煬帝に対して国書を送った

推古天皇15年(607年)、聖徳太子を摂政にしたことで知られる推古天皇は、

30代天皇・敏達天皇(びだつ天皇)の妻です。592年に、32代天皇・崇峻天皇(すしゅん天皇)が蘇我馬子に殺されたため、推古天皇は東洋・日本で初めての女性天皇になります。

彼女は「顔かたち煌々しく」と古事記・日本書紀にあり、とても綺麗な女性だったようです。

当時は、豪族が力をつけ、政治に口出しするようになっていました。

推古天皇は、「天皇中心の政治を取りもどしたい」と考えていました。

そこで、才能があって信頼できる、甥(お

い)の聖徳太子を「摂政」にして、政治を任せることにしたのです。

つまり、聖徳太子が活躍した時というのが、まさに推古天皇の時代なのです。

遣隋使「小野妹子」が持って行った聖徳太子の手紙。

「日出る処の天子、書を、日没する処の天子に致す。恙なきや。」で始まる国書に隋の煬帝（ようだい）は激怒しました。隋の歴史書に、そのように書かれています。

聖徳太子の送った日本の国書は、「国」と「国」として、互いに「対等」と述べています。《東の「天子」から西の「天子」



聖徳太子及び二王子像

に手紙を送ります、どうぞよろしく。》といった文面ですが、そもそも日本は何代か家系図を遡れば国民全てが天皇家につながっているという国柄です。これは日本という「島国」、さらに「世界一古い天皇家」ですから、まず間違いはないでしょう。

天皇陛下を父としてその子孫が国民なので、天災があれば、「天皇陛下」自らが被災地を訪れ、膝を折り、慰め、励ましのお言葉を直接かけられます。

被災者は整然と列をつくりじっと耐え、決して他人を押しつけて自分だけ救援物資を「我がもの」とすることはありません。そればかりか、「私はまだ大丈夫もっと困っている人に回してあげてください」との言葉が返ってきたと自衛隊員は、嗚咽することも少なくない、といます。

日本は「みんなが対等に支えあう」「みんなで作る」「みんなで分け合う」社会です。

ですから、列に並ぶ時は、力の強い者だろうが、権力者であろうが『対等』です。国民みんなが互いに『対等』という意識を共有しているから、安心してちゃんと順番に並んでいられる。それが日本人です。

聖徳太子は「対等」とあるという日本のメッセージを「隋の煬帝」へ送ったのです。この『対等』というメッセージが「隋の煬帝」を激怒させます。

なぜなら中国は「冊封体制」をとる国です。「冊封体制」とは『中国皇帝』を頂

点に周辺諸国の支配者と君臣関係を結び、成立させる国際秩序です。

この根底には、中国の「中華思想」がありました。中国は長い間、高度な文明を築いた広大な国であるとし、天命を受けて中国に君臨する皇帝を頂点とし、その他周辺諸国にも中国文明を教化するという考え方です。

「冊封体制」は、周辺国の君主が、「中国皇帝」の徳に敬意を払う証として、貢物（みつぎもの）を贈り、これに中国側が「返礼品」や「位階」を授ける関係として成立していました。

いわば属国のような関係だと思っていたら「タメグチ」で「対等」な「お手紙」だったので激怒した、というわけです。

推古天皇（593～628年）と飛鳥（692～710）は少し被りますが、飛鳥時代の末期に国号を『日本（日ノ本）』と

命名したことから太陽や日の出を意識し、日が昇ることを重視していた、ことがわかります。

日の丸国旗の始め

太陽をかたどった旗が用いられるようになったのは「大化の改新」（645年）以降と言われており、文献に初めて登場したのは797年の「続日本紀」（しょくにほんぎ）です。

「続日本紀」（しょくにほんぎ）では文武天皇（697～707年）が、701年の朝賀の儀で儀式会場の飾りつけに「日像」の旗を掲げたとあります。

しかし白地に赤丸ではありませんでした。

歴史的に見ても黄色や金色の丸が太陽を表し、世界中でも太陽を赤く書くことは少ない、のです。



「源平合戦図」平家が赤い旗、源氏が白い旗



那須与一 平安時代末期の武将、弓の達人。扇の的を射抜く話が『平家物語』に記されている。

日本でも平安時代末期まで赤地に金丸で、現在のように白地に赤く日の丸を染めるようになったのは、源平合戦の結果と言われます。官軍である平氏は赤字に金の太陽。源氏は白地に赤く太陽を染めていた。

壇ノ浦で馬に乗った那須の与一が馬にまたがったまま波打ち際からズブズブと進み出て、小舟の上で上下する赤地に金の丸の舞扇の要を狙ってひょ〜と矢を射れば見事に要を射抜き、舞扇はひらりひ

らりと揺らめきながら海の中へ。

これを見た源氏・平氏両軍は「あっぱれ」「あっぱれ」「やんや」「やんや」の大喝采。壇ノ浦で平氏が敗れ、「平家蟹」が獲れるようになると源氏による「武家政治」が始まります。幕府をひらけるのは源氏だけであり、平氏の末裔はどんなに力量があっても天皇家は平氏が幕府をひらくことは許さなかったのです。

「PTSD平家トラウマ」が天皇家に影響をあたえたからなのか？

実際に源氏以外は幕府をひらいていない、という事実があります。代々の将軍は源氏の末裔を名乗り、白地に赤く日の丸を掲げ、「天下統一」を成し遂げたことをアピールしています。しかし、万が一平氏が勝利していたら「赤地に金の太陽」の日の丸になったかもしれません。

赤色は正確には紅色で「博愛と活力」、白地は「神聖と純潔」を意味しています。

江戸時代「白地に赤丸」は縁起が良く



デザインの的に好まれたのでしょうか。上から下に日章旗が5枚。ある船は縦に並べて10枚。多い船になると20枚ほど日章旗を連ねています。現存する絵巻物でも「白地に赤丸」の扇が多くみられます。

江戸時代の後半になると「白地に赤丸」は縁起物の定番として認識され、幕府の公用旗として使用されるようになります。徳川家康公ゆかりの「熱海の湯」を江戸城まで運ばせる船の周りをぐるりと日章旗で囲んでいます。

1673年幕府は天領からの年貢米を運ぶ船と一般の船を区別するために船印として『朱色の丸』の旗を掲げる指示を出しています。

1854年、外国船と区別するため日本国共通の船舶旗「日本総船印（にほんそ

うふなじるし）」に日章旗を用いると公布されます。

1859年幕府は日章旗を「御国総標（おんこくそうじるし）」にするというお触書を出します。これによって日章旗、日の丸が国旗として確立しました。

源平合戦以降、「白地に赤く日の丸染めて」が定着した日章旗ですが日本という国が法整備したのは意外にも最近の事です。

1999年（平成11年）に『国旗及び国歌に関する法律』ができるまでは慣習で「日章旗」を国旗に。「君が代」を国歌としていた。

まあ、法律までつくらないでもよかったですと思いますが、法律ができてまだ30年というのも複雑な気持ちです、ね。

